

対面聴解における理解過程の分析 —理解構築の「流れ」に注目して—

横山 紀子

要 旨

対面聴解における理解過程を①聴解時の質問や反応、②聴解直後の再生作文、③回想インタビューによって調べ、聴解テスト（日本語能力試験聴解部門）の得点とも合わせて分析した。効果的な聴き手の聴解過程には、「テキスト」レベルのモニター、ストラテジーの連鎖的使用、既有知識や文脈知識の活用が特徴として現れた。また、「テキスト」レベルのモニター等の効果的な聴解過程の要素は、聴解テスト得点と相関関係があることがわかった。この結果は、対面・非対面という 2 つの聴解過程の理論的共通項を裏書きする材料になると考えられる。

【キーワード】理解過程、対面聴解、聴解ストラテジー、モニター、プロトコル

1. はじめに

第 2 言語における聴解過程の研究は、発話思考法や回想法によるプロトコル・データから聴解ストラテジーを抽出することを中心に研究が進められ、効果的な聴解過程の特徴として次のようなことが明らかになっている。

- (1) メタ認知ストラテジーを多く用い、特に「モニター」の使用が多い（O' Malley, Chamot & Kupper1989; Vandergrift1997a,2003 等）。
- (2) 意味処理の単位が大きい（O' Malley et al.1989; Goh2002 等）。
- (3) ストラテジーを連鎖的に用いる（水田 1995; Goh2002; Vandergrift2003 等）。
- (4) 既有知識、言語知識、文脈情報の 3 大リソースを巧みに利用する（O' Malley et al.1989; 水田 1995; Goh2002; Vandergrift 2003 等）。

これまでの先行研究では、ストラテジーの適用範囲が問題にされることは少なく、効果的とされる聴解過程は、聴解の得意な聴き手が用いる個々のストラテジーの多寡を中心に議論されてきた。本研究では、先行研究が指摘する「モニター」の重要性を前提に、その適用範囲に注目する。また、聴き手がテキストの進行にそってどのように理解（或いは理解放棄や誤解）に達しているかという「流れ」に注目する。さらに、これまでの研究がテープ聴解など非対面の聴解に集中しており、実際の聴解活動の中心である

対面場面の聴解過程を扱った研究が非常に限られる（Rost & Ross1991 と Vandergrift1997b）ことから、対面聴解に焦点を当てる。

2. 研究の概要

2.1 研究課題

- (1) 対面聴解の理解過程を理解構築の「流れ」に注目して観察する。
- (2) 理解過程の観察結果をテキスト理解および聴解テスト結果との関連から分析する。

2.2 調査対象者

非母語話者 12 人。日本語運用力は、日本語能力試験（以下、日能試）3 級の得点率が 65%～95%、2 級の得点率が 40%～60%。口頭運用力は、OPI 中級下～中級上。国籍は、ロシア 5 人、インドネシア 3 人、タイ、スリランカ、ニュージーランド、コロンビア各 1 人。

2.3 調査の方法

- (1) 対面聴解データ：

① 対面聴解における質問や反応：調査者が 1 対 1 で調査対象者に向かい、物語を話した。テキスト（粗筋を「稿末資料 1」に示した）は、900 字程度で、日能試 2 級以上の語彙率 10～15% 程度である。調査対象者には、日常生活の中で話を聴くときと同じように途中で質問をして構わないこと、聴いた話の内容を後で母語で書いて

もらうことを伝えてから話をした。調査対象者からの質問には、必要最小限の応答をした。この過程は録音および録画を行った。

②聴解直後の再生作文：物語を聞き終わってすぐに、「覚えていることを母語で書いてください」という指示により再生作文を書いてもらった。時間制限は設けなかった。

③回想インタビュー（母語）

(2)テスト・データ：

日能試3級および2級の聴解部門の成績

3. 対面聴解データの分析

まず、物語テキストを1主語・1述語のアイデア・ユニット（以下、IU）に分け、再生作文をIUのリストと照合して「正再生」「再生なし」「誤再生」のいずれかに分類し、再生率（「正再生」総数／IU 総数の％）を算出した。次に、聴解時の質問や反応および聴解後の回想プロトコルの双方を照合して、各調査対象者の理解過程を「図1」に示す「理解構築の流れ」に沿って分析した。「図1」は、各IUの理解に関して、聴取した音声から理解を構築していく過程に働く思考の流れを図式化したモデルである。以下に、分析の方法を述べる。

まず、理解過程において認知された問題を抽出

し、その所在について「単語」「文」「段落」「テキスト」のいずれかに分類した。また、問題をどのように解決しようとしたのか、問題解決の方策について、「質問」「類推」「放置」のいずれかに分類した。さらに、問題解決の方策を経た結果について、「理解達成」を得たのか、「理解に問題」があると認識したのか、あるいは「誤解」したまま記憶されたのか、理解の結果を3種に分類した。「放置」された問題は、「誤解」につながる場合と「未解決」のまま「記憶」に保持される場合がある。また、「理解に問題」があると認識された場合は、その直後に、或いは一旦「保留」された後に新たな問題の解決につながられる。

理解過程に問題がある場合だけでなく、問題がない場合にも聴解時の質問、反応および聴解後の思考回想が得られたが、これらも事例として抽出した。問題が「なし」の場合は、テキスト理解に基づいた（主に内容に関する）「質問」や聴解場面で表出された「反応」（同意、疑問、興味、驚き等を表現した発話）に加えて、回想で明らかになった「予想」（それまでの理解に基づいてテキストの先を予想するもの）と「発展」（テキストの理解を自分の知識や経験と関連させて思考を発展させたもの）に分類される思考がある。

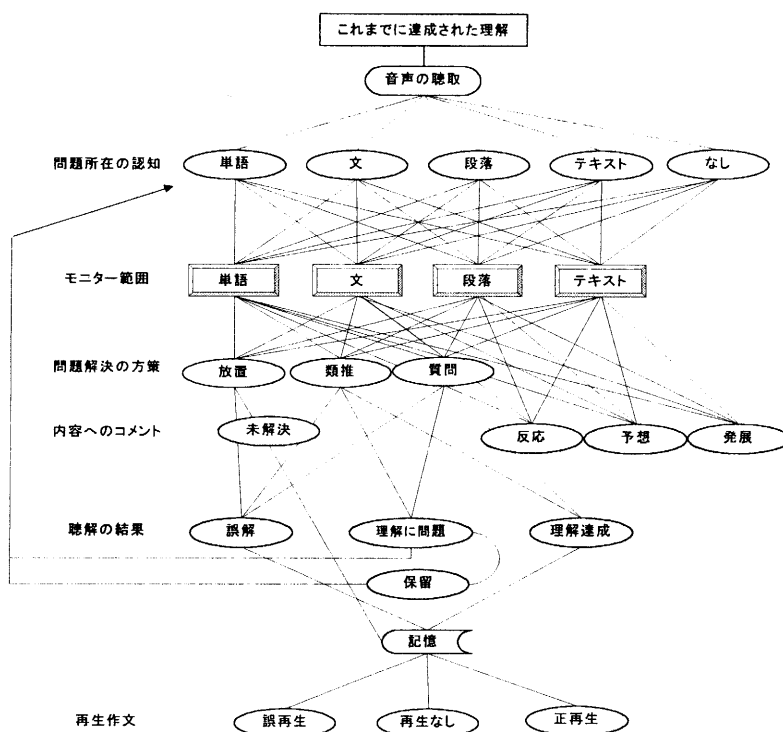


図1: 理解構築の流れ(モデル)

以上のように、理解過程で表出された質問や反応、認知された問題、解決に用いた方策などを抽出して分類したが、この際、「モニター」の範囲に着目し、回想インタビューによって得られた「質問」「反応」の目的や意図、方策を決定した理由、「予想」「発展」などの思考の根拠として述べられたことから理解の背後に働く「モニター」の範囲を「単語」「文」「段落」「テキスト」のいずれかのレベルに判定した。「段落」は「文」以上「段落」以下の範囲のモニター、「テキスト」は「段落」以上の範囲に渡るモニターである。以下に各レベルのモニターの例を示す。【 】は聴解時の調査対象者の発話、< >は回想、何もマークされていない部分は調査者が物語を話している部分である。プロトコルの該当部分には下線を引いた。

例 1：小出さんのうちに来たオウムは、毎日、きれいな声で歌うので、小出さんはとっても満足でした。【まんぞく？】まんぞく、ええと、とても嬉しい。【うん、わかりました。】<日本語を聞くときはときどき漢字を思い浮かべるが、このときは「不満」という漢字を思い浮かべて、満足の意味が推測できた。>（「単語」レベルのモニター）

例 2：そのうちに、ある日、小出さんは友達の家パーティーによばれたのね。【huum】それで、オウムにワイシャツとネクタイに黒い服を着せて、【uh-huh】パーティーに連れて行くことにしたの。【すみません、オ、オームは、um、どれですか。】どれ？【オウム】オウム？オウムは、鳥の種類です。<オウムは鳥だと思っていたけど、洋服を着たという話を聞いて、鳥ではないのかもしれないと疑問に思って、質問した。鳥の種類だと聞いて、オウムかもしれないと思ったが、鳥が服を着るのはおかしいから、服を着たのは小出さんなんだと思った。>（「文」レベルのモニター）

例 3：それで、小出さんはこう言いました。「じゃあ、賭けをしようよ。このオウムが歌わなかったら、僕が1万円払う。でも、もし歌ったら、君が1万円払うんだよ。【はい】そうすると、友達はおもしろがって1万円出しました。<「かけをします」は勉強したことがあると思うが、わからなかった。でも、続けて聞いていくうちに「賭けをする」の意味だと思い出した。>（「段落」レベルのモニター）

例 4：そのうちに、ある日、小出さんは友達の家パーティーによばれたのね。それで、オウムにワイシャツとネクタイに黒い服を着せて、パーティーに連れて行くことにしたの。【鳥がワイシャツと？】ええ。【あ、そう。】<ここで、もしかしたら（「オウム」という言葉について）誤解してたかもしれないと思ったので、確認した。鳥がワイシャツとネクタイをするのは変だから、やっぱり人だったのかもと思った。でも、笑い話の一部かもしれないと思った。鳥がイタリア語で歌うのも作り話なんだから、服を着るのもそうかもしれないと。>（「テキスト」レベルのモニター）

4. 分析の結果

4.1 理解構築の「流れ」の観察

3章で述べた要領でプロトコルを分類し、各調査対象者のIU毎の理解構築を図式化した。紙面の制約から図式の提示は省略するが、最も再生率が低く効果的でない聴き方をした調査対象者と、再生率もテスト結果も高く効果的な聴き方をしたと思われる調査対象者の理解過程には、それぞれ以下のような特徴が見られる。

効果的でない理解過程では、①「モニター範囲」が「単語」「文」というレベルに偏っており、「段落」「テキスト」レベルのモニターが全く見られないこと、②「質問」が1回しかなく、問題を「放置」したり「類推」したりした結果「誤解」に結びついている例が多いことが特徴的である。

一方、効果的な聴解過程の例では、①モニター範囲のほとんどが「テキスト」レベルであること、②「質問」が活発に行われたこと、③「質問」によって問題解決が得られず「理解に問題」が残った場合も一旦それを「保留」し、後に追跡的に問題解決の試みをしていること、④理解に特に問題がない場合でも活発に「反応」し、水面下の思考も「予想」「発展」の事例として活発に出ていることが特徴的である。③で述べた理解構築過程には、先行研究（水田 1995 等）が効果的な聴解の特徴として指摘するストラテジーの連鎖的使用が現れている。また、④で述べた「反応」「予想」「発展」の事例は、先行研究（O' Malley et al.1989 等）によって効果的だとされる既有知識、文脈知識の活用の結果だと考えられる。

4.2 理解過程とテキスト理解および聴解テスト結果との関連

12 人のプロトコルに見られた事例数とテキスト再生率との相関関係を調べたところ、再生率と有意な相関があったのは、「単語」レベルのモニターと「質問」だった。「単語」レベルの問題をしっかりとモニターすることと、認知された問題を「質問」によって解決しようとする試みがよりよいテキスト理解に貢献したと解釈される。

一方、聴解テスト得点（日能試3級および2級の合計得点率）とプロトコルの事例との相関関係を見ると、テスト得点と有意な相関があったのは、「テキスト」レベルのモニター、「予想」「発展」だった。対面聴解において「テキスト」レベルのモニターを活発に働かせ、「予想」や「発展」の思考を盛んに働かせた調査対象者は、聴解テストでも相対的に得点が高かったことがわかった。

5. 考察

対面聴解の理解過程を分析した結果、(1)効果的な聴き手だと思われる調査対象者の聴解には、「テキスト」レベルのモニター、ストラテジーの連鎖的使用、既有知識や文脈知識の活用など、先行研究で指摘される効果的な聴解の要素がしっかりと組み込まれて理解が構築されている過程が観察された。(2)理解過程とテキスト再生率および聴解テスト結果との相関関係を調べたところ、「テキスト」レベルのモニターや「予想」「発展」など、効果的な聴解過程の要素は、聴解テスト得点と関連していることがわかった。このことは、対面聴解に効果的に働

いた「テキスト」モニター、「予想」「発展」などの技能が非対面聴解である聴解テストにも貢献している可能性を示唆している。対面聴解と非対面聴解では、質問や反応ができるかどうかという条件に違いはあるが、水面下で起こる理解構築過程は理論的に同様である。今回の調査結果は、対面・非対面という2つの聴解過程の理論的共通項を裏書きする材料を示していると考えられる。今後、さらにデータを増やすとともに、縦断調査による聴解過程の変化についても見ていきたい。

参考文献

- Goh, C.(2002) Exploring listening comprehension tactics and their interaction patterns. *System* 30 : 185-206.
- O'Malley, J.M., Chamot, A.U. & Kupper, L..(1989). Listening comprehension strategies in second language acquisition. *Applied Linguistics*, 10(4) : 418-437.
- Rost, M. & Ross, S.(1991) Learner use of strategies in interaction: Typology and teachability. *Language Learning*, 41(2) : 235-273.
- Vandergrift, L.(1997a) The comprehension strategies of second language (French) listeners: A descriptive study. *Foreign Language Annals*, 30(3) : 387-409.
- Vandergrift, L (1997b) The Cinderella of communication strategies: Reception strategies in interactive listening. *The Modern Language Journal*, 81 : 494-505.
- Vandergrift, L (2003) Orchestrating strategy use: Toward a model of the skilled second language listener. *Language Learning*, 53(3) : 463-496.
- 水田澄子(1995)「日本語母語話者と日本語学習者（中国人）に見られる独話聞き取りのストラテジー」『日本語教育』第87号 66-78

よこやま のりこ／国際交流基金日本語国際センター

Noriko_Yokoyama@jpf.go.jp

稿末資料 1

小出さんはイタリア語で歌うことができるオウムを手に入れた。友達のパーティーによばれて、オウムを連れていった。「このオウムはイタリア語で歌う」と言っても友達が信じないので、賭けを提案した。一人1万円を賭け、全部で20万円集まった。でも、オウムは歌わずに小出さんは賭けに負けた。家に帰り「殺してサンドイッチにして食べてやる」と怒った。すると、オウムは言った「ちょっと待って。もう一度パーティーに行きましょう。次のパーティーでは一人10万円は払うと思いますよ。」<『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本（初中級）』（産能短期大学日本語教育研究室編）よりアレンジ>